

研究ノート

家族が付き添った場合の幼児の採血に対する対処行動の観察分析 Observation Analysis of the Coping Behavior for the Drawing Blood of the Infants Whom a Family Attends

平田 美紀^{1)*}, 流郷 千幸¹⁾, 古株 ひろみ²⁾
Miki Hirata¹⁾, Chiyuki Ryugo¹⁾ Hiromi Kokabu²⁾

松倉 とよみ³⁾, 鈴木 美佐¹⁾
Toyomi Matsukura³⁾ Misa Suzuki¹⁾

キーワード 採血, 幼児後期, 家族, 付き添い, 対処行動

Key words drawing blood, preschool children's, family, attendant, coping behavior

抄録

背景 1994年に児童の権利に関する条約をわが国が批准してから, 小児看護領域では子どもの権利の保障としてプレパレーションの概念が広まった. 特に認知能力や言語的表現力が未熟な幼児に対して, 身体的苦痛が伴う検査や処置では子どもの理解力に応じたプレパレーションの実施が重要であることが明らかにされている. しかし検査や処置の場面構成は医療者が主体であるため, 採血場面に親の付き添いを除外する施設が多い. そのため親から分離された幼児は, 不安の増大により処置室への入室も困難な状態を引き起こす. 親が採血に付き添う場合に, 子どもがどのような反応や行動をとるかは明らかにされていない.

目的 家族が付き添う幼児後期の子どもの採血場面をビデオに録画し, 子どもと家族の相互の関係性から対処行動を明らかにする.

方法 小児外来で家族が付き添って採血を受ける幼児後期の子どもが, 採血を受けて退室するまでの行動をビデオに録画し, 採血終了後に家族へ半構成的面接を行った.

結果 採血前は【緊張の高まり】【誘導を受け入れる】【抵抗する】【自分なりの方法で心の準備をする】の4カテゴリと8サブカテゴリ, 採血中は【誘導を受け入れる】【自分なりの方法で取り組む】【苦痛を表現する】【緊張をとく】の4カテゴリと8サブカテゴリ, 採血後は【終了を行動する】【緊張がとける】【満足感を得る】の3カテゴリと5サブカテゴリが抽出された.

結論 採血場面に家族が付き添った幼児後期の子どもは, 家族が寄り添うことで安心を得ることができ, 調整能力を発揮し, 子どもは自分なりの方法で立ち向かうことができる. また採血中は痛みや苦痛をその場で受け止めてもらえる家族の存在により, 子どもは少しずつ緊張をとくことができる. さらに家族からの称賛により子どもは満足を得ることができ, 早期に日常の姿に戻ることができた.

Abstract

Background Japan ratified a treaty about the Child Rights in 1994, a general idea of preparation spread out as security of the rights of children in the child care region. For the infants that cognitive ability and verbal power of expression are immature, it is revealed that enforcement of preparation which accepted the understanding of children is important by testing and the treatment that physical pain is associated with. However, as for the scene constitution of testing and the treatment, there are many institutions excluding the attendant of the parent in the drawing blood scene because a medical person is the main constituent. Therefore the infants isolated from a parent cause a state having difficulty in admission to the dressing room by an increase of the anxiety. When a parent goes with drawing blood, it is uncertain what kind of response and behavior children take. Also, it is uncertain what kind of response and behavior children take when a parent goes with drawing blood.

Purpose We determine coping behavior from the mutual relations of children and the family by shooting the drawing blood scene of the infants whom a family attends with a video camera.

Methods We recorded behavior before undergoing drawing blood, and being discharged from the infants who underwent drawing blood with a family in pediatric outpatient department on a video. And had an interview to a family.

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 School of Nursing, Seisen University

²⁾ 滋賀県立大学人間看護学部 School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

³⁾ 滋賀県立小児保健医療センター Shiga Medical Center for Children

*E-mail: hirata-m@seisen.ac.jp

Results We were able to extract 4 categories and 8 subcategories of [resist] [we prepare for the heart by a method for oneself] before drawing blood [tense surge] [we accept instruction]. We were able to extract 4 categories and 8 subcategories of [we express pain] [we remove strain] during drawing blood [we accept instruction] [we wrestle by a method for oneself]. We were able to extract 3 categories and 5 subcategories of [with feeling of satisfaction] after drawing blood [we act by the end] [tension is removed].

Conclusion The children can confront it by a method for oneself by the infants that a family went with drawing blood being able to obtain relief because a family snuggles up, and showing adjustment ability. Also, the children can untie tension by the presence of a family having you take a pain and pain during drawing blood on the spot little by little. Furthermore, we could obtain satisfaction, and the children were able to return to an everyday figure by the praise from a family early.

I. 緒言

児童の権利に関する条約がわが国で1994年に批准されてから、小児看護領域においても、子どもの権利に関心が向けられ、2000年以降プレパレーションの概念が急速に広まった。プレパレーションとは、子どもが病気や入院によって引き起こされるさまざまな心理的混乱に対し、準備や配慮をすることによって、その悪影響を和らげ、子どもや親の対処能力を引き出す環境を整えることである(及川, 2011)。また、身体的苦痛が伴う検査や処置に関する説明は親のみでなく、特に認知能力や言語的表現力が未熟な幼児に対して、子どもの理解力に応じたプレパレーションの実施が重要とされてきた。なかでも、痛みを伴う採血については、幼児に応じた援助(半田, 2008)や、幼児にみられる対処行動などが多数報告されている(流郷, 2008; 三上, 2010; 細野, 2010)。

その一方で検査や処置の場面構成は医療者主体であり、親の存在が処置の妨げになるという医療者側の判断により、親の付き添いを除外する施設が多い(鈴木, 2007; 杉本, 2005)。採血前に親から分離された幼児は、不安や恐れが増大し、処置室に入室することも困難となるため、親子を分離せず採血を行うことが望ましい(吉田, 2005)。また採血中も、子どもの安全基地である親がそばにいる効果があるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、家族が付き添い採血を受ける幼児後期の子ども(以下子どもとする)の対処行動を明らかにすることを目的とし、採血場面をビデオに録画し子どもと家族および看護師の相互の関わりに注目し分析を行うこととした。

II. 研究方法

用語の定義

付き添い家族：採血に付き添う親あるいは祖父母
幼児後期：子どもの発達段階における区分において、4歳以上の就学前の子ども

ディストラクション：子どもに対して行われる検査や処置の恐怖心を緩和するために「気をそらす」あるいは「気を紛らわせる」目的で行われる行為
採血：アレルギー検査の目的で行われる、正中静脈に翼状針を用いた採血

対処行動：子どもが採血を受ける際に示す身体的、心理的な反応および行動

1. 研究対象

A県内の子ども専門病院にてアレルギー外来を受診し、幼児後期の中で同意が得られた、採血を受ける4歳の男児2名と女児1名、および付き添い家族1名ずつを対象とした。

2. 調査期間

調査期間は、ビデオの解析期間を含めて平成22年10月～平成23年8月までとした。

3. 採血方法

対象施設では処置室前待合室の一角に採血の順序を説明したDVDを配置し、子どもに実施可能な対処行動を示している。処置室には採血台と大人用の椅子、サイドテーブルにディストラクション用キャラクターDVDやおもちゃを配置している。家族と子どもには、採血前に付き添いの希望と、穿刺時の姿勢を確認している。幼児後期の子どもの場合、看護師の指導により家族と向き合うように抱っこされた姿勢で採血を受けることが多い。採血の穿刺および介助はそれぞれ看護師が行い、抜針後には、キャラクターが描かれた絆創

膏を止血のために貼付する。

4. 調査方法

採血を受ける子どもと家族が処置室に入室し、採血を受け、退室するまでをビデオに録画した。ビデオ撮影は研究者1名が行った。採血終了後、家族から子どもへの採血に対する説明、子どもの過去の採血経験や反応について10分程度の半構成的面接を行った。

5. 倫理的配慮

本研究はA大学および研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得た。対象となった子どもと家族には研究の目的と方法、研究参加および途中辞退は自由であること、途中辞退による治療上の不利益は被らないこと、個人情報上の匿名性および個人が特定できないようにデータ処理を行うこと、得られた情報は研究以外に使用しないことについて説明し、家族から同意書および代諾を得た。

6. 分析方法

ビデオに録画された内容を、研究者らが独自に作成した記録用紙に看護師、家族、子どもそれぞれの言動を秒単位で記録し、細かな表情を繰り返し確認した。得られたデータを、入室から穿刺までを<採血前>、穿刺から抜針までを<採血中>、抜針から退室までを<採血後>の3段階に分け、子どもの言動を抽出しコード、サブカテゴリー、カテゴリーに整理した。データ収集から分析を小児看護の臨床経験が5年以上ある研究者4名と、対象施設の小児看護の臨床経験が10年以上ある看護師1名で行った。分析の信頼性を高めるためにビデオを繰り返し再生し、正確な意味の解釈に努めた。また撮影技術と分析精度を高めるために、事前に2例のプレテストを実施し本調査に臨んだ。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の背景

対象者となった子どもの過去の採血経験は、2回から4回以上であった。2組は親が子どもを抱っこし、1組は子どもが一人で座り祖母がそばで見守り採血が行われた。3名とも穿刺回数は1回で、入室から退室までの時間は4～6分であった。

2. 採血に家族が付き添う子どもの対処行動 (表1)

家族が付き添い採血を受けた子どもの対処行動をカテゴリーは【 】, サブカテゴリーは『 』で記載する。

1) 採血前の対処行動

採血前は【緊張の高まり】【誘導を受け入れる】【抵抗する】【自分なりの方法で心の準備をする】の4カテゴリーと、『緊張感が増す』『促されて行動する』『言葉や行動で抵抗する』『体に力を入れる』『安心を求める』『気分を変える』『採血以外に気持ちを集中させる』『進行の様子を確認する』の8サブカテゴリーが抽出された。

子どもは処置室前の廊下で家族から採血の必要性について説明を受けていた。その後看護師から名前を呼ばれると、言葉を発することなく家族の後ろについて入室した。また看護師が椅子に座るよう促すと子どもは抵抗なく家族の膝に座る、あるいは一人で椅子に座るなどの『促されて行動する』ことができていた。また看護師がディストラクションとしてキャラクターDVDを開始すると、子どもは『気分を変える』ことができ【誘導を受け入れる】ことができていた。しかし穿刺者が子どもの腕に触れると、処置の状況をじっと見て体の動きが止まり『緊張が増す』様子から【緊張の高まり】がみられた。子どもは椅子に座り、看護師から採血の手順を写真で示したリーフレットで説明を受けると、準備された物品や、自分の周りの看護師をじっとみるなど『進行の様子を確認する』行動をとっていた。さらに穿刺直前には「いや、いや」と言葉で表現したり、肘を曲げ『言葉や行動で抵抗する』などの【抵抗する】行動がみられた。穿刺の気配を感じた直後からは、家族に寄り添い体を密着させ『安心を求める』行動や、家族に促されてDVDを見るなど『採血以外に気持ちを集中させる』ことができていた。さらに穿刺直前には、ぎゅっと目を閉じることや息を止めるなど『体に力を入れる』行動から【自分なりの方法で心の準備をする】ことができていた。

2) 採血中の対処行動

採血中は【誘導を受け入れる】【自分なりの方法で取り組む】【苦痛を表現する】【緊張をとく】の4カテゴリーと、『促されて行動する』『体に力を入れる』『安心を求める』『進行の様子を確認する』の8サブカテゴリーが抽出された。

表 1. 採血に家族が付き添う子どもの対処行動

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
採 血 前	緊張の高まり	緊張感が増す	無表情
			じっと見る
			キョロキョロする
	誘導を受け入れる	促されて行動する	誘導されて処置室に入る
			促されて腕を出す
			誘導されて椅子に座る
			誘導されてキャラクターDVDをみる
	抵抗する	言葉や行動で抵抗する	腕を引っ込める いや、いやという
	自分なりの方法で心の準備をする	体に力を入れる	ぎゅっと目をつぶる
			息を止める
		安心を求める	家族の胸に顔をうずめる
			家族に体を密着させる
気分を変える		姿勢を変える	
		誘導されてキャラクターDVDをみる	
採血以外に気持ちを集中させる	自らキャラクターDVDに注目する		
進行の様子を確認する	針先に注目する		
	進行を目で確認する		
	周囲を観察する		
採 血 中	誘導を受け入れる	促されて行動する	促されて手をグーパーする
			促されて手を開く
			促されてキャラクターDVDをみる
	自分なりの方法で取り組む	体に力を入れる	ぎゅっと目をつぶる
			息を止める
		安心を求める	家族の衣服をつかむ
			家族に体を密着させる
	進行の様子を確認する	穿刺部位をじっとみる	
		注射器に溜まった血液の量をみる	
	採血以外に気持ちを集中させる	自らキャラクターDVDに注目する	
	苦痛を表現する	嫌な気持ちを表現する	嫌だ～という
			泣き出す
痛みを表現する		痛い、痛いという 表情をゆがめる	
緊張をとく	緊張感が緩む	嫌がる声小さくなる	
		ゆっくり目を開ける	
		体の力を抜く	
採 血 後	終了を確認する	目で見て終わりを確認する	穿刺部位に注目する
			穿刺部位と看護師を交互にみる
	緊張がとける	採血以外に関心を示す	シールを選ぶ
			自らキャラクターDVDに注目する
		安心する	表情が緩む
	笑顔になる		
	家族との距離（身体接触）が開く		
	満足感を得る	満足感を得る	ほめられて笑顔になる
ほめられてうなづく			
達成感を得る		笑顔で穿刺部位をみる	

認する』『採血以外に気持ちを集中させる』『嫌な気持ちを表現する』『痛みを表現する』『緊張感が緩む』の8サブカテゴリーが抽出された。

採血の穿刺者が穿刺のタイミングを子どもに伝え、子どもは一瞬息を止めることや目をつぶるなどの『体に力を入れる』行動がみられた。また痛みなどを訴えて『痛みを表現する』ことや、泣きだしたり『嫌な気持ちを表現する』など【苦痛を表現する】姿がみられた。穿刺直後は、家族に寄り添ったまま体を動かさず『安心を求める』行動や、注射器に溜まった血液の量を見て『進行の様子を確認する』ことや、さらにキャラクターDVDを見て『採血以外に気持ちを集中させる』など【自分なりの方法で取り組む】ことができていた。看護師と家族は「強いな」「ゆっくり（血液が）出ているよ」「上手にできているよ」などの言葉かけや、「（血液を）とったら、（針を）ピッと（抜針）して終わるよ」などと進行を伝えながら、手を握ったり開いたりするよう指示し、子どもは【誘導を受け入れる】ことができていた。また穿刺の痛みが軽減すると声を出さなくなることや、閉じていた目を少しずつ開けるなど次第に【緊張をとく】ことができていた。

3) 採血後の対処行動

採血後は【終了を確認する】【緊張がとける】【満足感を得る】の3カテゴリーと、『目で見て終わりを確認する』『採血以外に関心を示す』『安心する』『満足感を得る』『達成感を得る』の5サブカテゴリーが抽出された。

抜針後、看護師が終了したことを伝えるが、子どもは穿刺中の姿勢を継続したまま動かなかった。しかし家族が終了したことを伝えると体の力が緩み、穿刺部位を見て『目で見て終わりを確認する』ことで【終了を確認する】ことができた。また看護師の「おててでここ（止血部）押さえてね」や「絆創膏を貼ろうか」といった促しに応じて絆創膏を選ぶことや、自らキャラクターDVDに注目するなど『採血以外に関心を示す』行動がみられた。さらに終了を確認した後は『安心する』ことから【緊張がとける】ことができ、家族から離れることができた。また看護師と家族が「よくできたね」「がんばったね」と褒めると、笑顔になり【満足感を得る】ことができた。

IV. 考 察

1. 採血前

子どもは、処置室に入室する際に緊張した表情がみられたが、家族と共にいることで抵抗なく入室できており、家族の安心が子どもに伝わる（河村, 2011）ことで落ち着いて採血を受ける準備ができたといえる。さらに採血の手順を写真で示したリーフレットによる説明を受けることで、子どもはイメージしやすくなったと考えられる。家族の付き添いによる安心感と具体的な手順の説明により、子どもは抵抗なく椅子に座ることや採血台に自ら腕を伸ばすなどのような【誘導を受け入れる】ことができた。しかし看護師が物品を動かしたり、子どもの腕に触れ始めると、過去の経験から穿刺のタイミングが近づいていることを敏感に感じ【緊張の高まり】や【抵抗する】姿がみられた。この行動は先行研究（武田, 1997）で報告されている“処置の状況をじっとみる”ことや“いやだと腕を出さない”などと一致していた。また本研究では穿刺直前の緊張感が増す中、子どもは家族の体に顔をうずめることや、自分の腕を家族との間に密着させるなど穿刺のタイミングに【自分なりの方法で心の準備をする】ことができていた。幼児後期の子どもが不安・恐れ・拒否の気持ちを抱きながらも、逃げ出さずに検査・処置に向かおうとしていることは、調整能力が備わっているからである（吉田, 2005）といわれている。本研究においては、さらに家族がそばにいて身体的接触から安心を得ることができ、調整能力を発揮することができたと考えられる。また処置室入室後、子どもがキャラクターDVDに関心を示したことから、家族は穿刺前に緊張感を和らげる目的でキャラクターDVDを見るよう促しており効果的なディストラクションが提供できていた。家族は子どもの反応や行動を予測することができ（武田, 1998）、子どもの行動に合わせた関わりにより子どもの緊張感を一時的に緩和する効果があると考えられる。

2. 採血中

穿刺中には、【誘導を受け入れる】【自分なりの方法で取り組む】【苦痛を表現する】【緊張をとく】のカテゴリーが抽出され、【自分なりの方法で取り組む】以外は武田ら（武田, 1997）の報

告と同様の結果であった。本研究では穿刺直後、子どもは体を緊張させながらも家族に寄り添い体を密着させ安心を得たり、キャラクターDVDを見るなどの方法で【自分なりの方法で取り組む】様子がみられた。子どもは痛みや苦痛をその場で受け止めてもらえる家族の存在によって自分なりに取り組む方法を見出すことができた。また穿刺直後から付き添った家族は、看護師をモデルとし「つよいな」「上手にできているよ」などと言葉をかけ子どもを励まし褒める役割を担い実施していた。子どもに付き添う親の役割について子どもを励ますことや気をそらすこと、また子どもの気持ちに共感することである(岡崎, 2011) ため、看護師が役割モデルを提供することが重要である。

3. 採血後

採血終了後は、抜針直後に自分の目で見ることで【終了を確認する】ことにより、ようやく緊張を緩和することができていた。その後キャラクターDVDに見入ったり、絆創膏のキャラクターを選ぶなどの【緊張がとける】行動がみられ、これらは痛みからの回復過程(Bernadette Carter, 1999)でもあり、非日常的な環境から日常に戻るための時間であると考えられる。また本対象は先行研究(武田, 1997)にみられる“親にしがみつく、抱きつく”などはみられず、【終了を確認する】ことにより、早期に家族から離れることができていた。家族と共に採血に臨んだ子どもは、採血前から家族と共にいることで身体的接触を持ちながら安心を得ており、終了後の安心や慰めは必要としないのではないかと考えられた。さらに採血の終了後、看護師や家族から褒められることで子どもは【満足感を得る】ことができていた。4歳の子どもの大人を強く意識するようになり、誇り高き姿を見せるようになる(鈴木, 2006)ことから、看護師や家族からの称賛により、子どもは自分の頑張りを実感し満足感を得ることができたと考えられる。

V. 結 論

採血に家族が付き添う子どもの言動をビデオに録画し、その内容を分析した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 採血前には、家族がそばにいて子ども

に安心感を与え、調整能力を発揮することができる。さらに穿刺直前に家族がディストラクションを提供することで、子どもは自分なりの方法で立ち向かうことができる。

2. 採血中は家族の励ましや褒めるなどの関わりや、痛みや苦痛をその場で受け止めてもらえる家族の存在により子どもは自分なりの方法で取り組み、少しずつ緊張をとくことができる。

3. 採血後は家族からの称賛により子どもは満足を得ることができる。また採血の全過程を通して家族がそばにいて安心感となり、早期に日常の姿に戻ることができる。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究は対象者が3例と少なく、幼児後期の中でも4歳のみと限局したものであるため、一般化するには限界がある。今後は、幼児後期の対象者数を増やし検討を重ねていく必要がある。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきましたお子さま、およびご家族の皆様、対象施設の看護部長はじめ看護師の皆様にご感謝いたします。

文 献

- Bernadette Carter (著), 横尾京子 (訳): 小児・新生児の痛みと看護, p165, メディカ出版, 1999.
- 半田浩美, 二宮啓子, 西平倫子他 (2008): 心臓カテテル検査を受ける幼児後期の子どもへの模型と人形を用いた効果的なプレパレーション, 日本小児看護学会誌, 17 (1), 23-30
- 細野恵子 (2010): 外来で母親の付き添いのもとに座位で採血あるいは点滴を受ける幼児の対処行動, 日本小児看護学会誌, 19 (1), 88-94
- 河村雅子, 泊祐子 (2011): 骨髄穿刺検査と腰椎穿刺検査を受ける子どもと養育者へのプレパレーションの実践, 小児看護学会誌, 20 (1), 86 - 92
- 三上千佳子, 佐藤幸子, 佐藤志保 (2010): 幼児の採血への対処行動に関連する要因, 北日本看護学会誌, 13 (1), 1 - 11
- 及川郁子, 田代弘子編 (2011): 病気の子どものプレパレーション, 中央法規出版株式会社

- 岡崎裕子, 榎木野裕美, 高橋清子他 (2011): 採血・点滴を受けるプレパレーションにおける親の参画に関する親の認識, 日本小児看護学会誌, 20 (2), 33 - 40.
- 流郷千幸, 法橋尚宏 (2008): Effects of Nursing Interventions on Parents of Children Who Had Blood Drawn: Enhancing Parent's Sense of Efficacy of Support and Reducing Stress in Parents and Children, 日本看護医療学会誌, 10 (2), 8 -19
- 鈴木敦子 (2006): プレパレーションの理論と実際, 子どもにとってのプレパレーションの意味, へるす出版, 29 (5), 536 - 541
- 鈴木恵理子, 小宮山博美, 宮谷恵他 (2007): 小児の侵襲的処置における家族の付き添いの実態調査— 2005年の調査を1995年の調査と比較して—, 日本小児看護学会誌, 16 (1), 61-68
- 杉本陽子, 前田貴彦, 蝦名美智子他 (2005): 子どもが採血・点滴を受けるときに親が付き添うことについての実際と親の考え, 三重看護学誌, 7, 101-107
- 武田淳子, 松本暁子, 谷洋江他 (1997): 痛みを伴う医療処置に対する幼児の対処行動, 千葉大学看護学部紀要, 19, 53 - 60
- 武田純子 (1998): 採血に対する幼児の反応・行動に影響を及ぼす要因, 千葉看護学会会誌, 4 (2), 8 -14
- 吉田美幸, 鈴木敦子 (2005): 検査・処置を受ける幼児後期の子どもが必要としている関わり, 日本小児看護学会誌, 18 (1), 51-58

